

## 第8章 思い切って語る：戦争、平和、 そして俳優の声

一時の関節が外れてしまった。ああ、なんという運命、

—この整備のために生れ合わせた身の因果—

1964年のあるとても暖かな夏の午後、私のMGMの控え室でくつろいでいる時、私はロサンゼルスタイムズの記事、米国議会がトンキン湾決議案を通過させたという記事に出くわしました。

それは一編の不吉な知らせでしたが、しかし、その時点でそれを認識する人はほとんどいませんでした。

その決議は事実上、宣戦布告という法的かつ政治的な面倒な手続きなしに、戦争を拡大させ、世界で最も力のある国家の無敵のオーラを犠牲にすることを、リンドン・ジョンソンに白紙全権委任させたのです。それはJ・ウィリアム・フルブライト上院議員、上院外交委員会議長、に導かれて上院を通過しました、彼は後にベトナム戦争を厳しく批判する立場を取ります—1960年代後半の混乱の時代の皮肉な例の一つです。

暫くの間、決議は明らかな結果をもたらさずしてはしませんでした。ジョンソンは民主党のバリー・ゴールドウォーター大統領候補と平和討論で競い（もうひとつの皮肉）、ゴールドウォーターを危険な戦争挑発者と烙印を押し、「アジアの青年たちがすべき戦いにアメリカの青年を送らないこと」を約束したのです。しかし、ベトナムという時限爆弾は音をたて始め、ジョンソンの圧倒的な勝利の後、1964年が65年に変わり、戦争が激化し始めたのです。

1965年2月11日、ジョンソン政権はハノイによる南ベトナムの米軍施設に対するゲリラ攻撃への報復処置として北ベトナムを標的とした空爆を命じました。海軍空母搭載機による北ベトナムの南部にあるベトコンの集結地と言われる地域への最初の攻撃は、共産ゲリラが南ベトナムの中央高地プレートにある米軍施設を段階的に攻撃を繰り返した後に、ジョンソン(LBJ)によって命じられました。8名の米兵が死亡、108名が負傷しました。ベトコン(南ベトナム共産主義ゲリラ)がそして海岸の街クイニョンにある米軍基地を攻撃したとき、空海両軍の戦闘機がその戦争における最大の空爆で北ベトナム南部の海岸の供給基地を攻撃し、南北に分けられた北の方へ初めて戦争を広げたのです。

その1965年の冬の終わり頃、私は「0011ナポレオン・ソロ」のニールセンランキングのゆくりした伸び率で頭が一杯でした。しかしすぐに世界を舞台にしたその出来事は私の注目を引くべく目の前に登場する事になるのです。それは予期しない方法で始まりました。

「ナポレオン・ソロ」の番組で私と一緒に仕事をしていた中に、「リーダーダイジェスト」が私が今まで会った中で、最も忘れられない人物と表現するような人がいました。彼はロサンゼルススのハミルトン高校で、私の今日に至るまでの最も親しい友人の一人であるジョン・ハケットと一緒にいました。彼もまた、私の親しい友人であり、私の前の演劇の生徒であり、後に大スターとなったジャック・ニコルソンの友人でもありました。その彼の名はビル・ティナン、そして沢山の探検と冒険の中で、取り分け、彼はある時ロサンゼルスからメキシコシティまで歩いたことがありました。彼の炎のように赤い髭、哲学、宗教、アメリカの外交政策に対する広範な知識、そして思わず惹きこまれるアイルランド風ユーモアとウィットで、彼は私がショービジネスで敬愛する、リチャード・ハリス、ジェイソン・ロバーズ、リップ・トーン、そしてベン・ギャザラと肩を並べる存在なのです。

カルバーシティのMGM第三撮影所で「ナポレオン・ソロ」のロケをしていたある夜、ビルが私に東南アジアで起きている事に注目したことがあるか、あるいはフランス対中国のベトナムの背景について何か知っているかと尋ねました。私は自分の知識は1950年代中頃の確かディエンビエンフーという場所でおきたインドシナ戦争にとっても限られていると答えました。

ビルはそれからベトナムの戦後の歴史について、1945年に皇帝としてベトナムを支配していたバオ・ダイから説明を始め、パリにおけるホーチミ

ンの話から、ベトナムに戻り、人々を率いて1954年のフランス植民地排除へ導き、それによりジュネーブ協定が締結されるまでを語りました。それにより、1956年ベトナム全国統一選挙が行われました。人々は自分たちの政府を作る為に投票できるはずでした。戦争中に投票が行われていれば、ホーに勝利をもたらしてであろう、とアイゼンハワー元大統領の回顧録、「変革のための統治」に書かれています。

ビルによれば、アイゼンハワー政権の国務長官ジョン・フォスター・ダラスの妨害により、選挙は一度も行われなかったというのです。「ホーに対して真剣に向き合わなければ、俺達は大変な災難に陥るだろうね。もし仮に彼とその彼の共産主義の信念と支持者達が新世紀まで（その時点でほぼ35年先）戦わなければならないとしても、彼は決して挫けないだろう。」と言って話を終えました。

これは私にとって全く未知の世界でした。私の20世紀の地政学についての知識は、西洋の自由民主主義、ソビエト連邦で実践され後に中国でも実践される共産主義、ナチスドイツにてヒットラーによって創り出された国家社会主義、そしてスペインやイタリアに見られたファシズムの異なった形、に限られていました。そしてそれは全て、アメリカとイギリスを除き、人々が下から懸念を表明するのではなく、上からの力が降りてくる一党独裁政権でした。私はビルに「もっと教えてくれないか。」と言いました。

そして、このように私にとっての全てが始まったのです。ある旧友と偶然交わした会話が、私の時間の殆どと、6年近くに亘り実質的に私のエネルギーのすべてを付いたした追求へと導いたのです。

私の生まれながらの地政学に対する好奇心は、ベトナムの歴史とその巨大な北の隣国、中国との関係を調べるために、私を図書館へと向かわせました。私はさらにその戦争が全国紙、ニューヨークやワシントンの新聞や進歩的なタブロイド新聞「ザ ネーション&ザ ニューリパブリック」でどのように報道しているのかより注意深く見始めました。私はさらに断固として保守的な「ナショナルレビュー」がその戦争についてどう報じているかにも興味を持ちました。そしてその雑誌において、ビル・バークレイと彼の共和党の仲間たちにとってそのベトナムで急成長する戦争が単に40年代中頃からの冷戦政策を補強したケナン「封じ込め」政策の延長と捉えていることを発見しました。

朝鮮戦争に対してアイゼンハワーが語った理由、所謂「ドミノ理論」が、

60年代半ばに復活したのです。それは、すなわち、もし一つの国が共産主義に変わったら、段々とフィリピンから日本、オーストラリア、そしてハワイ、アメリカ西海岸までもが赤い東洋の驚異となってしまおうであろうと言うものでした。この時点で、もともとクレムリンだけに生息していた「魔王」は二つに別れ、今や北京をも永遠の住処としていました。

私の調査はドミノ理論に対する議論を探すものではなく、むしろ今、アメリカ人の遺体袋を夜のネットワークニュースで見ることにより、公になり始めた政策を正当化する歴史的な証拠を探すものでした。私の調査のアメリカの政策に反対を表明した助言者達はフランス歴史学者フランツ・シャーマン、ジーン・ラコトゥー、そして一番重要な人、ハーバード大学の国際関係教授であり、「Hell in a Very Small Place」「Street Without Joy」そして「The Two VietNams」著者である、ベルナルド・フォールが含まれていました。これら優れた歴史学者たちがベトナムについて皆とても強く意見が一致していました。彼ら全員「そこへ行くな。もし行くのであれば、長くなるな、なぜならホーのゲリラ達に対して制圧しようと戦おうとする如何なる国に対しても惨事が忍びよって来るから」と言っているようでした。

私は1919年ホーがウッドロー・ウィルソンの、人類にとって、最後で最善とされたアメリカの理想的なイメージを支持していたのを発見しました。彼はベルサイユ平和会議で全ての国は自決すべきというウィルソンの主旨を基本に訴えました。1945年には、ホーはアメリカの独立宣言をベトナムでのフランス植民地に終わりを告げる彼自身の宣言に使用しました。人々はしばしば思います、もしケネディが生きていたらどうであったらう、と。ベトナムに対して彼はどうしたであろうか？ ともかく、FDR、ハリー・S・トルーマン、そしてアイクと彼らのホーに対する考え方に戻りましょう。フランクリン・ルーズベルトであればホーの独立に向けての援助要請に好意的に反応したであろうか？ フランス植民地化政策に対する彼の嫌悪感に基づいて、多分ありえたかもしれない。結局はフランスはベトナムに対して、アメリカがフィリピンに行ったことをしなかったのです、すなわち、独立に向けて準備させるということ。

1945年、ルーズベルトは第二次世界大戦集結前に亡くなり、ホーはハリー・トルーマンに、ベトナム独立についてフランスを主導を切り離す役割を負うように英語で手紙を書きました。

OSS（戦略情報局）CIAの前身、そして国務省の観測者たちは、ベトミン

がホー・チ・ミンを彼らのヒーローとする強力な国家的な動きであることを理解しました、が、ワシントンでは理解しませんでした。

1945年の後のほんの短い期間ですが、ホーがアジアのチトーになる機会が開かれていたかもしれませんが—共産主義が国際政治の悪魔であるファシズムに取って代わられる前に。トルーマンは国内保守派とヨーロッパの同盟国からの圧力に負け、ホー共産主義を広げる立場で、止めなければならないと言うフランスの解釈に屈したのです。1950年代のアメリカは、本当に信じていたのです、例えばGEみたいにアメリカ人の見解での分別や良しとするものは、この星の残りの場所でも良いのだというように。違う考えを持つ人はほとんどいませんでした。言い換えれば、「我々が世界だ」と思っていたのです。

アメリカの外交政策の中心となるものは、当時も今も、自分たちの関心が人類の他の人々の関心と一致するという確信です。時々は、それは真実でありさえもすまず。しかし人類の他の人々が同意しないときは—1960年代、70年代のベトナム戦争、そして今日のイラクでの戦争—米国にとって、その国民にとって惨憺たる結果となりうるのです。

1952年、民主党がホワイトハウスで20年政権を取った後、ドワイト・ディビッド・アイゼンハワー、中西部の戦争の英雄で、生真面目な共和党員が合衆国大統領に選出されました。もし、新政権が1954年のジュネーブ合意のとおりにさせていたら、1956年にベトナムで、ホーチミンを統一ベトナムの大統領とする全国統一選挙をさせていたら？ もしそうだったら？

しかし事実はそうならなかったのです。そして4年後、JFKのニューフロンティア政権は、まだ内戦にはなっていないけれども、低レベルの南での反乱に燻りを押し付けられのです。ケネディ大統領は東南アジアを、彼が即刻注意を払わなければならない世界の紛争地域のひとつとして、最重要視したのであるでしょうか？彼の分身、演説原稿作成者で、伝記作家であるテッド・ソレンセンによれば、ノー、でした。ベルリンに壁が建てられ、ソ連が核実験を行い、国連がベトナムについて優先権を持っていました。

私の調査が進むにつれ、私はアメリカの関与に関わる知的な思慮深い議論の記録を見つけなくなりました。私はワシントンの友人、カメラ・ラ・スパダ、ハンフリー副大統領側近にコンタクトを取り、国務省にアメリカのベトナム関与を正当化している書類を、私に送付してもらえないかと頼みました。

彼女は引き受けてくれました。2、3日後に、国務省から「北からの武力侵略」と題された10ページほどの書類が国務省からマルホランドドライブに届きました。それは単にドミノ理論の焼き直しで我々がベトナムで犯す危険を強く理由づけるものには思えませんでした。

確かに、何が欠けていると思いました。しかし残念な事に東南アジアにおける戦争を我々が拡大させるのを支持する如何なる資料も探し出せませんでした。カメラは後に私のためにワシントンにあるあの有名なウォルター・リード・ホスピタルをお見舞いに訪れる機会を用意してくれました。その日私は何十人もの手足を失った若者たち（平均19歳）と過ごし、私を理知的にも感情的にもアメリカのベトナム戦争に関与に反対の立場を取らせることになるのです。

私は常に政治に興味を持って来ました。例えば、私はずっと市民権運動を積極的に支援しています。1960年代半ばのある夜、アングルの広報活動としてストックホルムを訪れていた時、私はグランドホテルの彼のスイートルームでマーティン・ルーサー・キングに会いました。実際のところ、私は彼の吃逆を古いミネアポリスの治療法で治したのです：息を全部出し切って、できるだけ吸い込み、そしてこれ以上我慢できないという所まで息を飲み込むという方法で。その後間もなく、私をその夜のマーティン・ルーサー・キングのスピーチの後に彼らの集まりに誘ってくれた二人、アンディ・ヤングとハリー・ベラフォンテが、人々が頭を狙って来たときに、「公民権座り込み」をどう使うかを私に説明しました。私にはなぜ彼らがそんな説明を私にするのか理解出来ませんでした、そしてあっという間に、そのことは忘れてしまいました—後日それが役に立つ日がくるのですが。。

（私とキング博士との繋がりには1967年春に、その反戦運動のおかげで復活しました、その時私はロサンゼルスで行われた全国午餐会でキング博士を紹介する光栄な機会を得たのです。彼の支持者たちの願いに反して、彼は再びアメリカがベトナム戦争に関与することに反対の立場であることを明確に主張しました。）

ですから、政治問題に関わるのは私にとって前例のないことではなかったのです。しかし、強力な反体制的な役割を担うことは一特にアングルのお陰で新たに築かれた有名人としての地位では—今までとは違う新しいことでありました。

1966年1月29日、インディアナポリスにて、私はリンドン・ジョン

ソンとその民主党一投票の機会が有る限りずっと支持していた政党一からの離脱を公に表明する初めての機会を得ました。その機会とは、フランクリン・D・ルーズベルトとジョン・F・ケネディに敬意を表して毎年一度開催される晩餐会でスピーチをするように、インディアナ州のマリオン郡の若き民主党員たちに依頼されたものでした。伝統的には、そのような行事での主たる講演者は政権政党の指導者—この場合は、ジョンソン大統領—を支援する熱烈なスピーチをするのが通例でした。出席者の誰もが私がそのようなスピーチを、ジョンソンの再指名と1968年の選挙を援護するようなスピーチをするものと予想していたと思います。それどころか私はジョンソンと彼の戦争にはっきりと反対であることを明らかにしたのです。

私がスピーチで取り分け言ったことは、「ベトナムでの戦争を終結させなくてはならない、何故ならもしそれが継続し拡大すれば、確実に結果的に人類に対する人類の最終結論：人類の滅亡、となってしまうであろう。」私はさらに、「強硬論者たちはすぐに召集令状を燃やす、あるいは本当に悲惨な場合—自分指針を燃やしてしまう、という誤って誘導された違法性を指摘します、そしてこれら抗議の背景にある理由を理解することが出来ず。。こうした行為を共産主義者だとか弱虫であると叫びたおします。しかし、彼らは何も燃やさず。。しかも燃やすことに反対し、静かな苦悶の中で行進する人々を黙らせることはできないのです。」と続けました。

反応は啞然とした静寂のあと、当てにしていた事とは全く異なるものを得た民主党中道派からの表面的な称賛の拍手が続きました。

私のスピーチについてのUPIの記事は、「彼はベトナムが1954年にジュネーブで約束された、が決して実行されることのなかった自由な選挙のための交渉を支持して、“殺人は止めるべきである”と信じている。彼は我々の観点を自由な選挙を広げることに賭けるべきと言う、しかし、もし失敗すれば‘。。我々はその時“共産主義”政府とどのように生きて行くかを学ばなければならない。。’世界の様々な場所で起きているように。」(私だけが私の意見の原稿を持っていたので、この引用はただ単なる意識であり、必ずしも正確ではありません)

UPIの記事は続きました、「あるベテランの民主党筋は“ヴォーンのスピーチはともかくひどいものだった。まるでデーリーワーカー誌(アメリカの共産主義者向け新聞)のスタッフが原稿を書いたように聞こえた。”と語った。“しかし”名前を明かすことを拒んだ党のある若いリーダーは“それはとて

も素晴らしいスピーチでした。間抜けな人達が憤慨するだけです。ヴォーンは、思っただけでも、言うことを恐れていた多くの人達の気持ちを声に出してくれたのです。」

私は、インディアナの新聞社でその場に出席していたのと、いなかったのと両方から賛否入り混じってはいても、大方否定的な反応を受け取りました。

アメリカ全土のそして国際的な反応が、1月31日月曜日に、私がMGMにもどると続きました。MGM, NBCからの一連の弁護士たち、アングルのスポンサー、そして私のショービジネスキャリアにおいて金銭的に関係のある人々、が私のスピーチのコピーを要求しました：そしてそれは、私がMGMの私の事務所にある古いコピー機で写しを作り、皆に行きわたりました。ロイター通信社もコピーを要求したメディア各社のうちの一つでした。

当時まだ反戦運動初期のころでは、歯に衣をさせない平和のメッセージはとても珍しくかつ衝撃的だったのです。私のスピーチは本来払われるべき以上の注目を受けたのです。

上院議員達、ヴァンス・ハートク（インディアナ）、ウェイン・モース（オレゴン）そしてアーネスト・グルーニング（アラスカ）が外交委員会議長、J・ウィリアム・フルブライトとともに、そのスピーチを連邦議会議事録に載せたのです。モースとグルーニングは1964年のトンキン湾決議に唯一反対した上院議員でした。私の新しい秘書のパトリシア・マニング（ビビアン・リー風の）はアメリカ全国やヨーロッパからの私へのスピーチや、ディベートへの参加のリクエストに責め立てられました。

1966年2月、私のインディアナでのスピーチから1ヶ月後、モース上院議員が私のマホランドドライブの家に一晩滞在しました。彼は私の日曜の朝食ゲストたちに、1963年11月、ケネディ大統領がああ運命のダラスへの旅に出発するほんの少し前に、モースがベトナムの内戦と言うものに対してのアメリカの将来の関与について会合を持ったことを説明しました。ケネディは、彼にテキサスからもどったら、南ベトナム軍へのアメリカの責任に関してはケネディの外交政策案件のトップに置くことを約束していたのです。ケネディは退却を望んでいた、できれば、1964年の選挙の前に、と言うのがモースが信じていたことでした。

私のインディアナポリスのスピーチでもう一つ話しておくことがありました、私のショービジネスの世界のルーツに関わる奇妙な縁です。その年の



春に私はナンシー・リーガンから昼食を一緒にしたいというメッセージを受け取りました。彼女にはもう20年以上も会っていませんでした、彼女がスミス大学を卒業して女優志望で会った時、「ラムシャックルイン」の公演で旅をしていた時に会って以来です。

何故此の時に彼女が私に会いたがったのか良くわかりませんでしたが、インディアナポリスでのスピーチのちょっと前に私が記者会見に出席したのを思い出しました。そのうちの質問のひとつが俳優ロナルド・リーガンが現職の patt・ブラウンカルフォルニア州知事に対抗して出馬する可能性についてだったのです。記者の言い方が皮肉っぽかったのに対し、私は真剣に返答しました「リーガンは出馬するだけでなく、勝利するに十分なチャンスがあります。」と。その場は私の予測に対しての馬鹿笑いで揺れました。

ナンシーと私は MGM の食堂で昼食を楽しみ、何気ないおしゃべりの後、彼女は用件に入りました。「最近読んだ記事によると、あなたとロンは政治的には対極にあると確信しているわ、特にベトナムに関してはね。でも、あなたがインディアナポリスで、彼の政治的な将来の可能性について言ってくれたことに、私たち二人がとても感謝していることを、知って欲しかったの。」

「一体どうしてそれを知っているの？」と尋ねました。そんな台本を受け取ってはいないはずですよ。

「ええとね、あなたは知っていると思うけど、ビル・バックレーはロンの政治的なヒーローで指導者なの。ビルの義理の弟が、ブレント・ボゼルでね、あなたが言ったことを私たちに教えてくれたの。」

私はボゼルの思い出しました。彼は私のことを北ベトナムのリーダーに対して同情的なのを指して「アングルから来た男、それはホー」と呼んでいました。

ナンシーと私はその後、1983年、「スーパーマンⅢ」のホワイトハウスでのプレミアで再会するまで、会うことはありませんでした。彼女は私を温かく迎えてくれて、あのときの昼食のことを驚くほど詳しく思い出しました、一方彼女の夫は、ぼわっと魅力的でした。ナンシーは彼女の夫の最も賢明なアドバイザーでした、私はいつも彼女は彼の最大の財産であると信じていました。

1966年3月のはじめ、私はカルフォルニア民主党評議会（CDC）会

長のシー・キャサディーに会うようにとの招待の電話を受けました、民主党の進歩派で主に北カルフォルニアをベースにしていました。キャサディーは連邦議会議事録に載った私のスピーチを読み、3月15日のカルフォルニア、ベイカーフィールドでの大会で基調演説をしてほしいと依頼しました。後のカルフォルニア上院議員になるアラン・区ランストンがCDCのアメリカのベトナムへの関与に反対する方針に反抗して私のスピーチの前に退出しました。

そしてその時私の前に反戦運動のもう一人の鍵となる人物が登場したのです。それがアラード・ロウエンスタインでした。

フクロウのような眼鏡をした知的な天性の演説家であるロウエンスタインは、民主党の活動家で、私は彼には1965年の春、パサデナ劇場でハムレットを演じたときに初めて会いました。マルシー・ボリーは当時「フォトプレイ」と「モダンスクリーン」の二つの映画関連誌の記者をしていました。彼女は「アングル」がらみで私に何度かインタビューをしていました。そして私に「ハムレット」の切符をもっているのだけれども、追加でもう少し入手できないかと電話をしてきたのです。彼女は大学時代から知っている友人—彼女が最も知的で今まで聞いた中で最高の演説家と考えている—を連れて来たいというのです。それがアル・ロウエンスタインでした。

私たちは舞台のあと軽食を皆で一緒にとりました。アルと一緒に3、4人の若者がいました—彼はいつも彼の周りに若者を伴っていて彼を家まで送らせていました（彼は運転するのが嫌いでした）。皆が去ったあと、私はマルシーをそばに呼び尋ねました「どの男性が君が電話で言った人なのか良く分からなかったよ」。彼女は「分厚い眼鏡をかけた人よ。そして彼があんなに静かだったのは、「ハムレット」を見たのが初めてで、とても感動して口ごもってしまったからよ。」と言いました。今振り返って見ても、これはとても驚くべきことです、何故なら私の知っているアラード・ロウエンスタインは何に対しても決して口ごもることがなかったからです、ロバート・ケネディと話そうが、国連で演説しようが、です。

当時はロウエンスタインはまだあまり知られている存在ではありませんでした、しかし最後には彼の政治的な目覚ましい功績に対し、大変な名声をえることとなります。作家のディビッド・ハルベルスタンは後に彼のことをこのように述べています、アラード・ロウエンスタイン、「リンドン・ジョンソ

ンに反対した男」、は1968年という悲惨な年の唯一の真の政治的な英雄である、と。

ニューヨークの弁護士、39歳のロウエンスタインは南アフリカのアパルトヘイト問題やアメリカ南部の市民権活動など自由主義のベテラン活動家でした。彼は精力的な組織主催者で、カリスマ的なリーダーであり、雄弁な演説家でした。最近の伝記作家は彼が何らかの形でCIAと協力していたのではないかと指摘しています、1950年代のアメリカの学生たちの活動を作り出したように、です。しかし60年代半ばではまだ表面化していませんでした。

1966年までには、ロウエンスタインの焦点はベトナム戦争に移っていましたが、それはジョンソンの「偉大な社会」という社会計画を破壊してしまい、アメリカの若者を自由主義と民主党から遠ざけてしまうと彼が危惧していたからです。カーティス・ガンズ、民主運動のためのアメリカ進歩主義(ADA)の活動員、と一緒に仕事をしながら、ロウエンスタインはベトナムからアメリカが緩やかに撤退し平和的な交渉のための草稿を書いていた。1967年の秋には二人で34州を旅し、学生たちのグループと政治的なリーダー達にジョンソンを「放り出す」ことの必要性を演説して歩いたのです。

1966年の春に、ロウエンスタインは、リンドン・ジョンソンを退かせるための一見不可能に見える彼の戦いについて、マホランドドライブの私の棲家で話をしてくれました。彼はインディアナポリスでの私のスピーチを読んでおり、彼の作り出している“ジョンソン放り出し”運動に参加しないかどうか知りたがりました、彼の言葉によると「あらゆるトークショーで話ができる注目度の高いハリウッドスター」として、です。

私は含み笑いを浮かべて答えました。「君は政治的な色気違いだと聞いているけど、今回は行き過ぎだと思わないかい、リンドン・ジョンソンが1964年に大差で勝利したことなどを考えると。」

ロウエンスタインは私のユーモアを捉えなかったか、あるいは無視をしました。その代わりに彼はこう言いました。「ああ、私は政治に関しては相当情熱的だよ。でもこれは今が奮闘しなければならない時なんだよ、東南アジアで起きていることを考えたらね。」そうして私はその活動に加わり、その時から私たちは常にコンタクトをとることとなったのです。アルはその日、私の家を出発する前に彼の第一の選択肢はロバート・ケネディであることをは

つきりと述べました。もしボビーがロウエンスタインの要求を拒否したら、他の政治家にアプローチするであろうと。彼は民主党の方が良いけれども、もし必要であれば相応な共和党员でも支援をするつもりでした。

6月には、私はディセンティング デモクラッツの全国議長に任命されました。その年の終わりまでには、そのグループは20州以上において、16万人の会員を保有し、国内で他の何千もの民主党員と戦術的に足並みをそろえていました。(私の高校時代からのまだ存命の一番古い友人、ビル・スミスは反戦運動がまだ政治的主流になる前に彼の教師としてのキャリアをディセンティング デモクラッツのミネソタ支部を率いることに注ぎました。) マスコミは私の活動を、私がベトナム戦争に公に反対する最初の有名俳優であると繰り返し述べながら、興味をもって報道しました。

FBIが私の活動を追跡しだしたのは、そのころでした。私に関する140ページのファイルは、それは何年もの後に情報開示法を利用して私が取得したのですが、1966年5月のハリウッド新聞「ディリーバラエティー」の私が北京訪問に興味があると記述した記事から始まっていました。それは以下のような記事を含んでいました。

“ ロサンゼルスファイルは開示している、名前の公表を辞退したある人物はFBIロサンゼルス支局に電話で、1966年6月6日、ロバート・ヴォーンは最近マーヴ・グリッフィンショーに出演したと報告した。ヴォーンは「0011ナポレオン・ソロ」シリーズのスターで、彼の最近のソ連への旅行が「今までで一番収穫のある旅であった」と述べた。ヴォーンによると、彼がソ連に滞在している間、多くの人々が彼のもとへやって来て抱擁し、彼らの子どもたちとアメリカの子どもたちが平和に共存できることを望んでいると言ったという。この情報をFBIロサンゼルス支局にていきょうした人物は名前とそれ以上述べるのを拒否した。”

テレビで公に放送されている内容を、あたかも極秘情報のように述べる”密告者“からの電話をFBIが取り上げる事自体、奇妙に見えませんか？私には奇妙に見えます。

その少し後に、FBIロサンゼルス支部は以下の指示を受けています。

“ヴォーン、「0011 ナポレオン・ソロ」のスターで有名な俳優は、活動的にアメリカのベトナム関与に反対する様々な集会で演説をしているのを観察した。これに関して、彼は共産主義活動にかかわりアメリカのベトナム政策に反対する活動に関与する数人と連携して活動する機会を持ったと言える。

彼の活動と全国的に有名なTVスターである彼の見解を見た結果、ヴォーンについて正当な理由があれば、安全保障あるいは資産保有についての貴方の勧告も含み、すみやかに報告を準備し提出するように貴方に求める。貴方の調査は、もし仮に共産主義的活動の可能性がある場合、それを決定づける為の論理的に信憑性の高い情報提供者と確立された情報源に限り、貴方の指標と提供者の再考察を行うべきである。この件に関し、さらなる調査活動は本部からの事前の指示がない限り行わないものとする。

戦争のその時期にこの国で何が起きていたのかを見ることはとても興味深いことです。ベトナム戦争に反対しているという理由だけで—それも沢山のアメリカの上院議員と仲間の市民たちと分かち合っており、もちろん当然とすべき私の権利として行っていた立場であるのに、私が証拠もなしに嫌疑をかけられ、「共産主義活動」と同盟している可能性があると言われていたことを知りました。

私は「シカゴに來い、コンクリートに埋めてやる」などのような警告の手紙など、沢山の殺しの脅迫状を受け取りました。有り難いことに、私は個人的に襲われる事も、起訴されることも、迫害されることもなく、もっと重要なことに、子どもころから唯一知っている仕事が出来なくなる可能性を意味するブラックリストに載せられることもありませんでした。

FBIの私に関するリストは1973年5月8日の日付で以下のように終了しています。

“ヴォーンが国家の安全に対する脅威であるとみなす徴候はどこにもない。彼が述べている見解や彼の現在の職業からして、密告者として発展していくことは考えられない。ヴォーンについてさらなる調査は必要なく、ロサンゼルス支部はこの件を終了案件として処理する。”

FBIがこの結論に到達するまで6年もの歳月を要し、その間何千もの納税者のお金が費やされていることを誰が知っているでしょう—私が何をして、話しているのかを誰もが簡単に知り得ることができる完全なる公開討論会で主張している6年もの間です。

\*\*\*

数か月が経過し、ベトナムでの戦争も悪化し続けるにつれ、本国での反戦運動も増大していきました。そしてその活動のより明確な代弁者の一人として、私は人々の要望にこたえて公の場に登場し続けたのです。私は民主党の資金集めの大会の多くに登場し、さらに私が第一学年に在学したミネソタ大学が私に演説するように招待をし、さらにUCLA、ハーバード、USC、そしてその他多くの大学で演説をしました。

1967年1月、私の政府の東南アジアにおける外交政策に反対する遊説の2年目が始まった時、私はスピーチの中でベトナムについて言われている以下の6つの論点を引き合いにだし、それぞれが間違っている理由を示すように努力しました。

その1、法的な主張「アメリカは南ベトナムに対して責任がある」

ディーン・ラスク国務長官はとりわけ、SEATO（東南アジア条約機構）合意、アイゼンハワー大統領の南ベトナムとの二国間協定、そして1964年のトンキン湾決議を引き合いに出しています。

1954年ジョン・フォスター・ダラス国務長官は、マニラ、インド、パキスタン、セイロン、ビルマ、タイ、インドネシアそしてフィリピンに招待されています。ベトナムがSEATOの一員であったことは一度もありません。イギリス、フランスも、SEATO合意による責任の可能性がなく、他の国の内戦に干渉するための条項などない状況において、関与することを拒否しました。

国際法第一人者たちも、1967年1月15日の「ニューヨークタイムズ」における声明、「アメリカのベトナム介入は違法である」との題名で、同様のことを指摘しています。

トンキン湾決議はLBJに配慮する決議であり、東南アジアで大規模な地

上戦の権限を与えるものでは決してありません。アイゼンハワー大統領が、1954年10月ジエム大統領に申し出た援助では、はっきりと経済的支援のみであると述べています。そしてケネディ大統領も亡くなる3ヶ月前の1963年9月2日に、「最終的な分析において、これは彼らの戦争である。彼ら自身が勝つか負けるかなのである。我々は装備を与えることは出来る。助言者として人をそこへ送ることは出来る、しかし彼らが勝たなければならない、ベトナムの人民が勝たなくてはならないのだ。」と発言しています。

論点その2、政治的論点：「我々は武力侵略を止めなければならない。」

「武力侵略」という言葉は国際的な合意においてはある国がいわれのない攻撃を別の国にする、あるいは武力によってある国の統治を他の国が脅かすことを、通常定義しています。ベトナムの場合は2つの国の事を扱っている訳では決してないのです、一つの国なのです。その国は、1954年のジュネーブ協定により、一時的に二つのゾーン、北と南に分けられたのです、1956年に行われるべきはずの自由な全国統一選挙の準備をするための時間をとるためにです、しかしそれは我々アメリカが我々の操り人形である南のジエム大統領との共謀で阻止したのです。

我々がジエムを支えるために軍隊を派遣し、ジュネーブ協定を破った時、そしてそれにその援助を増大させた時、人口の80パーセントを代表する南のゲリラが再びこの彼らの自由にたいする抑圧に抵抗するために組織化され、以前のリーダーであるホー・チ・ミンに助けを求めたのです。彼が我々の違法な侵入を弱めるために助けを送った時、我々はその行為を「武力侵略」と位置付けたのです。

次に、宗教的論点「我々は神を信じない共産主義を止めなくてはならない」

ウィリアム・ウエストモーランド大将、ベトナムのアメリカ軍司令官は、その戦争がキリスト教十字軍の今日の姿であるかようなことをほのめかしている。(7代後のジョージ・ブッシュもイラク戦争において「十字軍」という言葉を使用し、イスラム教テロリストを喜ばせてしまった。)伝道者ビリー・グラハム、そしてカトリックのカルデナル・スペルマンも参加し、その「タカ派」に位置付けてしまった。

フルブライト上院議員は、1964年のこの宗教論争の皮肉をこのように述べている、「ワシントンに存在する大統領とローマに存在する法王、モスク

ワに変わりなく存在するむ魔王、という戦後時代の自明の真理の一つになってしまった」と。共産主義者その信仰の制約がいかなるものであろうと、悪魔の子どもではないのです。これはイデオロギーであり、イデオロギーは銃で殺すことはできないのです。

次に戦略議論：「中国を阻止しなくてはならない」

アメリカ空軍の契約下にあるランド研究所は、中国のその攻撃的傾向の範囲について、徹底的な調査任務を行いました。空軍の苛立ったのででしょうが、彼らは中国は攻撃的傾向があると責められるべき記録もなく、責められるべきではないとの報告を提出しました。

ある国が国際的に攻撃的であるとされる重大案件は何であろうか。我々は通常インド、パキスタン、ビルマの国境紛争を引き合いに出している。しかし、これらの国境紛争はイギリス植民地化政策、イギリスの中国国境線との土地分割再調整による直接的な結果である。（第二次世界大戦時の我々の友人である、蒋介石はこの案件については中国を公に支持している）中国は何世紀にもわたり交渉を通して、国境線を前や後ろに動かしてきているのです、そうすることにより、将来に得る道を探求するのでもなく、これらの地点において、自身の立場をしっかりと保持しているのです。

そして最後に、我々は中国共産主義のベトナムへの影響を引用している。しかしながら、ホー・チ・ミンが祖国解放の戦いを始めたのは中国が共産主義国家になる遥かに前の1949年であることを思い出すべきなのです。

次に軍事的議論：「北爆は交渉へ導く」

爆撃は、イギリスにおいて、ドイツにおいて、韓国において見られたように、敵を膝まづかせるように仕向けるには効果がないことが証明されています。そして我々は第二次世界大戦のピークにヨーロッパに対して落とすと同様の量の爆弾をベトナムに対して落としているのです。

南では百万ものベトナムの子どもたちが負傷し、二十五万人以上が死亡していると見られています。そして、この大虐殺にも拘わらず、あるいはおそらくそのため、我々は敵を交渉や論議のテーブルに着くことからさらにさらにと遠ざけてしまっているのです。私たちは爆撃が敵の戦闘意欲をくじくことが出来ないこと、北の士気を下げることが出来ないこと、南への物資補給を減少出来ないこと、そして平和の目標に向かって進展をもたらさないこと



に気づくべきなのです。

そして最後に観念的議論：「我々は自由のために戦っている」

ここでの疑問は、だれの自由のために戦っているのか？と言うことです。もちろん、私たち自身の自由のためではありません。ベトコンは我々の地域の自由をひとつも脅かしてはいません。ベトナム人の自由をも脅かしてはいません。それでは誰の？南ベトナムの80パーセントの人々が十分に明確にしています、彼らは私たちが申し出ている自由と言うブランドに興味がないということ。我々は彼らが断固望んでいることのひとつを与えることに失敗し続けているのです、彼ら自身の国を回復する権利をです。

それでは誰の自由のために戦っているのか？キー空軍元帥（ヒトラーの崇拝者の一人）と彼のサイゴンのスタッフ、たった一人の例外をのぞいて、が彼ら自身の人々のためにフランスと戦った北の人々です。

オハイオのステファン・ヤング上院議員は「今日アメリカがベトナムに関与している唯一の理由は、ベトナムを親米/反共産国家にする試みに失敗したことを認めることのできないプライドのためである。」という意見の人です。

他のなんでもない、我々は過失を認めるのを避けるために戦っているのです。ウォルター・リップマンが単刀直入に「我々は面目を保つために戦っている。」と言っているようにです。

我々の侵略、戦い、そしてベトナムに居留するための6つの理由は、はじめから基本的に誤りだったのです、何故なら、北ベトナムの人達にとって、いかなる妥協も敗北に等しいのだということを我々が理解していなかったからなのです。

彼らは妥協するために20年間も戦いつづけているわけではありません。私はアメリカが東南アジアに関わり続けるのを、そのような毅然とした敵対者と意味のない戦いを続けるのを見たくはありませんでした。1967年までにはアメリカ人の大半も望んでいませんでした。しかし政府当局とその支持者たちがききいれませんでした。そして論争は激しくなり、次第に何百万もの一般市民をも巻き込んでいくのです一何人かの俳優も含め。

\*\*\*

おそらく、反戦運動における私の個人的役割がもっとも高まったのは、超保守主義者のウィリアム・F・バックレイが「ファイアリング ライン」でベトナムについて彼とデバートをしようとして挑戦してきた1967年のころであったと思います。その年は彼がこの右寄り思考の番組のホストとしての最初の年でした、そしてそれは最終的にはテレビ史上もっとも長寿な番組の一つとなりました。

私の友人であるジョン・ハケットは来るべきデバートを「ベテランのチャンピオン対若い挑戦者」と評しました。私も彼と同じ意見だったので、すぐに一番近くの隔離して籠れる場所、カルフォルニアのピア・ブロッソムの聖アンドリュー小修道院に行く準備をしました。私はモハメッド・アリがボクシングのタイトルマッチに備えるように一あるいは人生最高の役に備える俳優のように、このイベントのために練習をしたかったのです。

私は以前にジョン・ブスコ修道僧のゲストとしてその修道院に滞在したことがありました。今回は私が他の修道士に話しかけない、あるいは話しかけられないようにする我儘を許してもらえるかどうかジョン修道僧にお願いしました。彼は同意してくれて、私はビル・バックレーの書物、彼の最初に出版した、彼の母校の全能神との関係を扱った本「神とエールの男」にまでさかのぼって集めて、修道院に到着しました。私はさらに私の初期のベトナムの歴史の考察を再検証し、ベトナムに対してアメリカが使うドミノ理論についての情報とその他ベトナムの内戦に干渉する我々の政府の怪しげな理由を加えました。

「ファイアリング・ライン」番組出演の日は、ビルのスケジュールの問題のため、最終的に1967年7月8日、ロサンゼルスでと落ち着くまでに、何度か変更になりました。前のワシントン、D.Cのコンスティテュションホールでの予定は、最後の最後でキャンセルになりました。この7月の前には、私はUCLA、USC、そしてハーバードで話をすることに同意をしていました、全て1967年5月に、です。

私はビルがスタジオにギリギリで飛び込んで来たのを覚えています。彼は息子のクリストファーをデズニーランドへ連れて行っていたため遅れていたのです。そして私を見つけて、あの中部独特のアクセントでほとんど叫ぶようにして言いました、「平和はどうなってる？」と。私はビルにと言うよりも、「偉大なディベート」に立ち会おうとその場にいた私の友人たちのために、「回転木馬」からメロディーを使い、「あちこちで破裂してるよ」と歌うよう

に切り返し、言葉を巧みに操るその顔にカサっとした笑みをもたらしました。

その「ファイアリング・ライン」の1年目ではビルは彼の個人的な弁護士、C・ディッカーマン・ウィリアムズを連れてきて、ビルとゲストの間の上段に座らせていました。彼の役割は裁定者、議長、司会者のいずれかであり、その討論で誰が勝ったか最終的に判断する役割も担っていました。さらにビルの左側に一観客からは見えないステージの上座に一大きなボタンがあり、彼が必要と思ったらいつでもウィリアムズ氏に討論に入り込むよう指示できるようにになっているのに気が付きました。

私の調査員のジュニタ・セイヤーが、「ハーパー」の一説からきていると思うのですが、「アメリカの南北戦争についてのもっとも素晴らしい分析のいくつかはゲティズバーグにいなかった人々によってなされた」と言うバックレーの見解を見つけしていました。それで私は、彼のこの使って応えたかったので、ビルが私にベトナムへ行ったことがあるかどうか尋ねることを期待していたのですが、残念ながら、カメラに映っているときには起きませんでした。

ビルの最初の質問「分別のある人が、ベトナムへの関与を正当化することができない理由の一つは、実現されることのなかった1956年に予定されていた選挙にあるのですか？」に対する私の応答。

見ていた人によれば、私の300数語の返答はその詳しい日付で、ビルを驚嘆させたようでした。ビルの反応は、私が明らかにその時代の細かなことをかなり勉強していると理解したものでした。

そして私たちはたっぷり1時間にわたり、ベトナムでの対立の歴史、アメリカの共産主義世界に対する恐れは過剰であるか否か、貴重な資源の乏しい、明らかにアメリカの安全に直接的に関係のないはるかに離れた地での戦争にかかわることに本当に関心があるのか否か、について討論を続けました。バックレーは、ホー・チ・ミンとヒトラーの間に、ベトナム戦争と第二次世界大戦の前兆との間に平行線を引きました、そしてその平行線に対して私ではできる限り精力的に崩そうと戦いました。

その過程で、バックレーは、たくさんの民主党の政治家の名前を引き合いに出しました。ジョン・F・ケネディからアーサー・シュレジンジャー、そしてテオドール・ソレンセンらが時に私の立場と相反する声明をしていたという証拠を出して、私を困惑させたかったのです。そしてそれはこのような

やりとりとなりました。

ヴォーン： 私はシュレシンジャー氏とソレンセン氏の意見には反対です。

バックレー： あなたがどれだけの人に反対しているかますます興味を惹かれますね。

ヴォーン： ええ。

バックレー： そうするとついには、たぶんあなたはプラトーやアリストテレスにまで反対することになるのでは。。

ヴォーン： そうですね。実際のところ、それに関してはたくさん論文を書いていますよ。(笑)

バックレー： そして私は。。

ヴォーン： 喜んでコピーをお送りしますよ (笑)

これだけの年月の後にその写しを読むのはとても驚くべき経験です。アメリカの TV 聴者は (少なくとも何人かは)、北緯 17 度境界線の厳格な意義、ジョンバーチ協会の歴史、ジュネーブ協定の正当性などのような専門的な領域を含む外交政策に関する 1 時間にもおよぶデベートを座って見る意思があったと言うことに気づき、はっとさせられます。

C・ディッカーマン・ウィリアムズはその夜をこのように言ってまとめました。

紳士淑女の皆さん、今夜私たちは鷹派と鳩派の討論を行いました。残念ながらこの討論はここで終了となります。どちらの羽がよりかき乱されたのでしょうか、鷹でしょうか、それとも鳩でしょうか？それを決めるのはあなた方に託したいと思います。議長として、残念ながら、私は自分自身で結論を出すことはできません。ヴォーンさんありがとうございました。バックレーさんありがとう。

コート・キャシディー、シ・キャシディーの息子でハーバードの学生であり、

私をハーバードで話すように招待した彼が、その夜の観客の中にいました。彼は後で飲みながら、J・ウィリアム・フルブライトがアメリカの外交政策について書いた「権力のおごり」(The arrogance of Power) という最近の本を引用し、「ヴォーンが尊大な力(the power of arrogance)により、ディベートに勝ったのは間違いない」と言いました。

バックレーと私はその後かなりの年月の間、心からの手紙のやり取りをし、ビルは私がビル・グラントと持ったWABC\*のラジオ番組にもゲスト出演してくれました。

\*\*\*

**戦運動への徐々なる私の関わりの仕上げとして、私は1966年67年を通して、その反戦運動のもっとも象徴的な有名な人物と友人になりました：ロバート・F・ケネディです。**

ボビーとの最初の出会いは、彼がお兄さんのキャンペーン責任者をしていた1960年の春でした。彼は当時34歳で行動も発言もとても控えめであったのを覚えています。

私の友人で広報マンのジェリー・パム、後にマイケル・ケイン、ロジャー・ムーア、ショーン・コネリーなどの広報をすることになる人物ですが、彼がボブ・ジョセフ、カルフォルニアの民主党政治活動における高位のコンサルタントであるボブ・ジョセフと協力関係を結びました。彼が私をボビーに紹介しました。私たちは皮肉にもウルシャー大通りにアルアンバサダーホテル、8年後彼はそこで暗殺されるのですが、そこで会いました。

次に私たちが会ったのは1965年、私が博士号修得のために学んでいたUSCでした。大学の学長が、ボブとエセルが学部と学生たちにスピーチをするためにキャンパスを訪れた時に、私に彼らをもてなすように依頼したのです。

私がボビーをキャンパスの学生集会へと案内している時、ある時点で学生たちの集団が上院議員の車に押し寄せて来ました。ボビーは私の方を向き尋ねました。「こういう場合、ナポレオン・ソロだったらどうする？」と。

このコメントの後、RFKは講堂の一番前の席のエセル私と一緒に席につきました。エセルは近い将来東海岸にくることはないのかと尋ねました。私はアंकルのこのシーズンの撮影が終わったら、エルケ・ソマーとボリス・カーロフと一緒に「ベネチタ事件」－深刻なスパイ映画－という映画の撮影のためにロンドンとベニスへ行く予定だと応えました。（もしあなたがある程度の年齢の男性であれば、あの素晴らしいエルケ・ソマーを覚えていることでしょう。彼女はとても魅力的なだけでなく非常に聡明でした。当時彼女は私の友人、ハンフリー・ボガードの伝記「ボギー」を書いた作家のジョー・ハイムズ、と付き合っていました。

ですから、私とエルケの間には友人の感情に敬意を表して、ロマンスへ発展する許可はおりていませんでした。）

とにかく、エセル・ケネディは「ヒッコリー・ヒルに立ち寄る時間を作ってくださいませんか？」と言いました。そこはヴァージニア州のマクリーンにある彼らの所有地でJFKとジャッキーが一時所有していたところでした。もちろん私はイエスと応えました。

翌年の春の金曜日夕方、私はナショナル空港（今のリーガン空港）に到着し、ケネディ家の子供たち、友人、そして彼らを世話する人たちで一杯になった2台のワゴン車に迎えられました。子供たちは興奮して我を忘れました、特にそれぞれ15歳、17歳のジョーJr.とキャサリーンが興奮していました。家は中も外も、私がウォルサー38を手を持った私の写真を含み、アंकルのポスターで埋め尽くされていました。

上院議員夫妻はミシシッピーでスピーチをするので翌朝まで留守でした。その日の残りと夜を通して、私はケネディ家の洗礼を受け続けました、大変な数のゲームをし、また他の方法で私の根性を（いやナポレオン・ソロののでしょうか、ケネディ家の子供たちの目には私とナポレオン・ソロは同じに映っていたでしょうから）試されました。

私は屋根裏のようなどころにある、ケネディ家の小さな女の子用の寝室の一つを与えられました。エセルが小さな子用に作った洗面台を使って腰が痛くならないことを願います、と言うメモを残していました。

これが私のヒッコリーヒルへの数多くの訪問のはじまりでした。そこへは大体いつも、マックスウェル・テイラー、ジョン・グレン、アダム・ウォリンスキー、ピーター・エデルマン、そしてアート・バックウォルドらを含む、

追放されたケネディ政権のような人たちがゲストで迎えられていました。

私のヒッコリーヒルへ旅のうちの一つに、偶然にもジョンソン大統領自身との初めての遭遇となったものがあります。

インディアナポリスでの私の反戦スピーチの数か月後のことです、私はワシントン DC のマディソンホテルに滞在していたのですが、その時、ジョンソン大統領夫人であるレディーバードの私設秘書である、ベス・エイベルから頼まれたという誰かから電話を受けました。ベスがジョージタウンでその夜ハウスウォーミングパーティをするので、私に来てほしいというのです。

私は「今夜はロバート・ケネディに会いにヒッコリーヒルへ行く予定である」と説明しました。実のところ私はパット・ローフォードをエスコートする予定だったのです。

彼女は笑って、「それではヒッコリーヒルに行く途中に寄ってははどうです?」と言いました。

「正装していくので、ちょっとね」と私は言いました。

彼女は「それは全然かまいませんよ。」というので、立ち寄ることに同意しました。

しかしながら、わたしがそこへ着くと、それはテキサススタイルのパーティでした。皆がブーツをはきてテキサス風の服装をしており、私だけが正装でした。

それでもなお、私は入って行き、何人かの人に紹介され話をしていました。いろいろな進歩的な民主党員やレディーバードと。そしてその時、私の後ろでだれかがボソボソと言うのが聞こえました：「大統領閣下、大統領閣下」と。私が振り返ると、そこに LBJ、198センチほどの身長にブーツを履き、テンガロンハットをかぶり213センチもの高さにもなろうという彼が立っていました。

誰かが、「ロバート・ボーンを紹介いたします。」と言いました。私が「こんにちは、大統領閣下」と言うと、彼は私を見下ろし、冷たく微笑み、ものうげに「おーそうか、君がそのスピーチをした奴かね〜」と言いました。私は微笑み、肯定的に頷き、何も言いませんでした。

すると彼は私をひつつかみ、彼の隣になるように引っ張りました。腕を私肩に回し彼のとても近くに引き寄せました。(写真で LBJ が反抗的な立法者たちにしているようなのとまるで同じに) 彼は顔を私に近づけ、そして「じゃあ元気だな！」と言い、私をふきんの用に群集の中に放り投げたのです。

私は大声で笑いましたが彼は全く笑いませんでした。そして彼は立ち去り、それが私の LBJ との大きな出会いでした。忘れられない出来事です。

彼にはもう一度会いました—ロバート・F・ケネディの葬儀で。

翌朝、「ヒッコリーヒル」で私がこの話を詳しくボビーにすると、彼は「あの LBJ と顔つき合わせてかみ砕くだき、睨み付けだって！」と大笑いをしました。私のベトナム逃避行期の数少ない輝いた瞬間の一つです。

お気づきのように、私はボビー・ケネディを深く敬服し、とても好きでした。

しかし彼がいつも愛されるのでないような複雑な面を抱えていたことは否定できません。

このことは彼の生涯の間でさえも広く知られていたことでした。実際のところ、彼の二面性を表して、記者たちに「良いボビー」と「悪いボビー」という用語が常に使われていたのです。私はこの両方のボビーを直に見ることとなりました。

ある日の午後、私のカルフォルニアの友人が、私がヒッコリーヒルのケネディ家のところへテニスをしに行くときに、一緒に彼の御嬢さんを連れて行ってくれないかと頼んできました。それは少々厚かましいことではありましたが、私は承諾をしました。彼女はケネディ家が好むようなきゃしゃな感じの若い女性ではなかったのですが、ケネディは彼女の心地悪さを感じとり、その午後中彼女に対して十分にもてなすことが出来ませんでした。彼は彼女のところへ頻繁にやってきて、何か他に必要なものはないか、楽しんでるか、飲み物はどうか、どこか他の場所へ座りたいかなど、いろいろと気遣っていました。彼は、彼女には以前に会ったこともないし、また再び会うこ



ともないであろうにも関わらず、これ以上ないくらいに気を使っていました。

その後、私たちはケネディと私対マックスウェル・テイラーとエセル組でテニスをしました。

私たちは負け（何故それを特に覚えているのかはわかりませんが）、そしてタッチフットボールを始めました。アート・バッチウォールとジョン・グレンが参加していました。ケネディにはブルマスという大きな犬がいたのですが、それがボビーが私にパスを投げた時になぜかフィールドに入って来たのです。犬はボビーを噛み、そして彼はとてつもない怒りを表しながらその犬を蹴ったのです—私が同じような場面を見たのよりも遥かに大きな怒りでした。悪いボビーの一例です。

多くの民主党員が、私も含んでですが、ケネディにジョンソンに対抗する準備をするように嘆願していました。彼の近い友人達やアドバイザー達は、新聞記者のアダム・ウォリンスキーや友人のリチャード・グッドウィンも含み、出馬するように嘆願していました。しかし彼のお兄さんの古くからのカウンセラーたち、二人の「テッド」、弟のエドワード・ケネディとアドバイザーのテオドール・ソレンセンを含む、は、慎重になるように強く主張していました。これまでは、彼は、アメリカがベトナムに介入していることに対して反対—そして個人的にジョンソンは嫌い—だけれども、ジョンソンを振り落とす見込みはありそうもないと言って、辞退していました：ボゴタの司祭がローマ法王を退けさせるようなものだと言った彼は例えました。いずれにせよ、彼は現職の大統領に反対して民主党を分裂させる意思はなかったのです。もし彼が大統領選に出馬するのであれば、1972年の方が彼にとっての状況が良さそうでした。

ケネディの姿勢の論理は私には理解できませんでした。毎週、ベトナムからの遺体は増加し、新しい死傷者の数をもってして、1964年に、我々の国をベトナム内戦にこれ以上関与させないと強く約束したジョンソンに投票した何百万ものアメリカ人たちが11月には民主党を見捨てるであろうことがますます明白になっていたのです。党を分裂させるどころか、ケネディの立候補は党を救えるはずでした。

私はRFKはジョンソンに反対したいのだと感じていました、そしてその戦争がそれを可能にしたのです。そうでなければ、彼が1968年にLBJに対抗して出馬する土壌はなかったのです。ケネディ家の後継者は明らかに単にダラス事件に伴う怒りと情熱だけで出馬しているかのように見えたでしょう、

1964年の大統領暗殺のたった9ヶ月後の民主党大会で演壇に立った彼に対しての35分間の歓声とスタンディングオベーションに証明されるように。

RFKは直感的にそれを感じていたのかもしれませんが。伝わるころによれば、1967年5月末ごろに彼はケネディ家の友人であるアーサー・スラシンジャーに「リンドン・ジョンソンの後5年にどうやって耐えることが出来るんだ。あの気の狂った奴がさらに5年だよ！」と声高に言っていたようです。しかし、ハムレットのように、ボビーは自制し、依然と「この事柄に正確に考え過ぎ」、彼を支持者達の願いと彼自身の良心の命令に従って行動するこの機会を攫むことを拒んでいました。

公平に考えると、個人的な恐れがケネディの躊躇に影響していた可能性があります。一つ目は彼の政敵の一人一多分J.エドガー・フーバーFBI長官のようですが一が彼のお兄さんの政権時からのカストロ暗殺計画などの秘密を暴露して立候補をぶち壊そうとする危険性がありました。さらに当然のことながら暗殺の恐怖もありました。彼のお兄さんのように、ボビーも肯定的、否定的にも両方の熱狂的な感情を引き付けていました。1968年の過熱した雰囲気の中では、発狂したあるいは観念的に駆られた殺し屋がケネディ家の二人目を殺害して歴史に名を残そうとしようとするのは容易に想像がつかしました。

そして、ミネソタのユージン・マッカーシー上院議員がアラード・ローウェンスタインの主張に駆り立てられ救いの手を差し伸べました。

1967年、ADAのカーティス・ガンズがジョンソンに対抗して反戦運動を率いる立候補者を民主党内で探し始めました。彼らは何人かその旗手となりうる人たちに話を持ちかけました、南ダコタのジョージ・マクガバン上院議員、アイダホのフランク・チャーチ、そして戦争に反対したことで知られる軍人のリーダージェームズ・ギャビン将軍に。皆、辞退しました。

一方、ローウェンスタインはロバート・ケネディと、ワシントンの事務所やケネディ家所有のヒッコリーヒルで定期的に面談をしていました。9月26日、彼はヒッコリーヒルでケネディに対し、ジョンソンは大統領選から追いつくことが出来る可能性がある」と説明し、最後の嘆願をしました。

ケネディはローウェンスタインの判断に同意しました。彼はジョンソンを「卑怯者」と呼び、大統領が民主党大会の前夜に脱落するかもしれないと予言しました。しかし、ボビーはまだこのドラマの主演を演じることを拒み

ました。彼は「野望と羨望」と非難されるであろう、そしてジョンソン（そして多分他の人たちも）は彼の立候補がケネディ家の復讐の一部であると見なすだろうと言ったのです。

10月の終わりのころについて、マッカーシーがこの聖戦に署名しました。11月、コンサーンドデモクラッツ会議（ローウエンスタイン、ガンズ、ジェラルド・ヒル、カルフォルニア民主党評議会の議長であるジェラルド・ヒルが作った反戦グループ）のシカゴ大会で、マッカーシーが立候補を表明しました。私はあるをその大会で紹介し、そして彼はヒットラーのような熱烈なる演説でマッカーシーを紹介したのです。そのひよわな政治家/詩人は、私には、その大会にほぼ憤りと涙を残すように見えました。

ほとんどの参加者には、それは望みのない目標のように見えました。現職大統領にその彼の党の中から挑戦することは極めて稀で、一般投票者が候補選出プロセスに関われるようにした1970年代の選挙制度改革前のその時代では、大統領候補を選出するほとんどの権限は州の党組織や代表たち委ねられ、彼らはジョンソンを頑なに支持していたのです。

マッカーシーの遠慮がちな性格も事態改善の助けにはなりませんでした。学究肌で、神経質、古典の引用者で詩人である52歳のマッカーシーはカリスマ性に欠け、時に熱意がなさそうに見えました。1968年の初期、彼の立候補は、個人的な魅力でも、民主党の中で一そして国全体としてベトナムでの戦争に関し、増加する不安によってでも、そしてアラード・ロウエンスタインのエネルギーによってでも、そんなに上手く運んではいませんでした。

一方、ケネディは苦しみ続けていました。11月26日のCBSニュース番組「フェイスザネイション」での驚くべきやり取りでは、座談会のジャーナリストたちが、戦争そしてジョンソン大統領に反対する彼の立場での今後の計画について質問して悩まし続けていたときに、ケネディは「私に何が出来るのかわかりません。。あるいは私がすべきことはある意味地球を離れようとするのと変わらない。」と答えていたのです。

これは日曜の朝のTVの政治番組には奇妙な言い方でした、特に殺害された大統領の弟としては。（あの精神的に痛めつけられたハムレットが自殺について熟考していた時の有名な独白―「生きるべきか死ぬべきか」―が必然的に私の心に思い起こされました。） マーティン・アグロンスキー記者があわてて「上院議員、誰もあなたに地球から飛び降りることなど望んでいません

よ。明らかに」とさしはさみました。

しかし、絶望的な相反する感情の交錯の特徴は本当であり、この国のほとんどが共有していたベトナムのジレンマへの苦悩を反映していたのです。

舞台は整いました、1968年、私たちの国の歴史で、最も苦痛に満ちそして精神的衝撃的な痛手を受けた年—私にとってもその時代を生きた誰にとっても永遠に忘れることがないであろう時へ向けて。